

小学校における学級力の向上をめざした実践

～コロナ禍での心理教育アプローチ～

高度学校教育実践専攻教職実践高度化系

生徒指導コース

実習責任教員 小坂 浩嗣

氏名 岸田 秀豊

実習指導教員 阿形 恒秀

キーワード: 学級力, 自己表現ワーク, 構成的グループエンカウンター, コグトレ

第1章 問題意識と目的

第1節 問題意識

筆者は、これまでの現場経験から、生徒指導とは単に厳しく規律ある生活を求めるということではなく、児童をよく理解し、その実態に合った支援をすることが大切であると学んだ。生徒指導の奥深さに魅力を感じ、それについてしっかりと学びたい、専門的な知識や知恵、技能や技術を身につけてさらにステップアップしたいと強く思うようになった。

第2節 実習校の課題

実習校は、児童数約120名、学級数10(内特別支援学級4)、教職員数約20名の小規模校である。

1年次、実習校に訪問して先生方への聞き取りや児童の様子を参与観察した。すると、学級経営に困難が見られる学級が複数あることが分かってきた。また、県学習状況調査児童生徒質問紙調査結果から、多くの児童が前向きな学校生活を送ろうと意識しているが、否定的回答をした一部の児童の影響により、学級が落ち着かなくなるようなクラスがあることが推測された。そのような状況を改善・解決していくために、学級の仲間意識や児童一人一人の帰属感を高めたり、自分のよさに気づけたりする温かい学級づくりを課題とした。

しかし、2年次の実習当初は新型コロナウイ

ルスの影響で、学校が始まってすぐに臨時休校となった。再登校後の児童は、否定的な声や気だるそうな態度が目立っていたため、1年次に計画していたことを横に置き、児童の心の状態を探るために「こころの健康調査票」を作成、実施した。その結果、ほぼ全ての児童が心に何かしらのストレスを感じていることが分かった。子どもたちのストレスを和らげることが学校生活へ適応する第一歩と考え、そこへのアプローチから実践を始めることにした。

第3節 先行研究

まず学級経営における生徒指導でめざすことや機能について検討した。文部科学省(2010)『生徒指導提要』には、生徒指導を通してはぐくまれていくべき資質・能力として、自発性・自主性、自律性、主体性の3つがあると示されている。また、日々の教育活動において、①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助することという生徒指導における3つの機能に留意することが求められている。

次に、学校教育の基礎的集団であり、子どもたちにとって学校生活の基盤である学級集団について検討した。田中(2010)によれば、学級経営の課題が4点挙げられている。1つ目は、共通の目標に向けて頑張ることができ

ない学級，2つ目は，友だちの考えに自分の考えを積み重ねながら対話をしていくことができない学級，3つ目は，協力して助け合うことができない学級，4つ目は，ルールや規律が守れない学級である。これらは筆者がこれまで抱いていた学級経営に関する問題意識と重なる点が多い。このような課題に対して，子どもたちが主体となって学級を作り上げていく力を，田中(2009)は「総合学級力」と名付け，4領域16項目からなる力の総体と捉えた(図1)。これら4つの力を子どもたちが発揮するために，担任には生徒指導における3つの機能を働かせながら指導することが不可欠と考える。

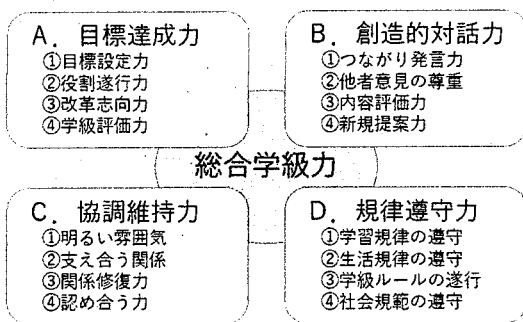


図1 総合学級力

さらに，学級集団づくりを目的にした実践研究から，取組の工夫や課題について検討した。武井(2007)は，小学校高学年の児童に構成的グループエンカウンター(Structured Group Encounter; 以下，SGEと略記)を実践し，検証した結果，学級満足度と自尊感情は正の相関関係にあることや，状況に応じて個別対応の必要性を報告した。また，佐藤(2014)は，田中が定義する総合学級力を参考にプロジェクトを提案し，学級力向上に対する効果や課題を検討した。その結果，ほとんどの領域や項目で学級力の向上が認められ，子どもが自分自身を肯定的に捉える傾向が見

られたことを報告している。これらの実践で子どもたちに自尊感情が高まった結果は，自分への信頼を生み出し，頑張りや優しさを発揮させたものと捉えた(久我，2015)。また，これらの取組過程において教師は生徒指導の3つの機能を働かせていたことを考察した。

以上，先行研究から総合学級力を向上させることを軸としつつ，児童の実態に応じて生徒指導の機能を生かしながら，SGEなどの活動を計画的かつ臨機応変に実施することで，安心して生活できる学級づくりへとつなげていけるような実践をめざすこととした。

第4節 実践研究の目的

本実践研究では，学級力の向上をめざした心理教育アプローチによる個人と集団の活動プログラムを開発・実践し，学級集団づくりに対する教育効果について検討することを目的とした。効果の指標には，田中(2009)の「総合学級力」を「学級力」と改名し採用した。活動内容は，自己表現活動，SGE，コグニティブトレーニング(以下，コグトレと略記)を参考に計画を立てた。また，新型コロナの影響で新たに生じた児童の課題や，担任と連携して実践する中で新たに改善すべき課題などに対し，臨機応変に活動を実施した。

第2章 実践計画

第1節 実習の概要

筆者は，生徒指導主任補佐，新5年副担任，新2年副担任と位置付けられ，協力学級は2年生と5年生とした。不登校傾向や発達障害(疑いも含む)の児童などへの個別支援もあわせて検討し，実施した。また，現場の先生方への負担は最小限に抑えること，多くの先生方にとって活用しやすいものを成果にすることの2点を基本スタンスにして実践を行った。

第2節 実習の計画

実習校は新型コロナウイルスの影響で臨時休校となった。筆者はこの休校中に心理面での負担が児童にも大きくのしかかっていると考え、分散登校してきた児童に対し、心を癒すきっかけとなるような自己表現ワークを宿題形式で実施することにした。6月に再登校となり、児童の心を癒すことや友達関係を再構築することをねらいに、自己表現ワークとSGEを組み合わせた授業構成で学級活動に取り組むことにした。この際、ソーシャルディスタンスにも配慮した。2学期には、担任の聞き取りから認知機能の未熟さをスキルアップする取組として、宮口(2015)のコグトレを計画、実施することにした。しかし、5年担任が9月の途中から病休になり児童に落ち着かない様子が見られたため、コグトレの実施を中止し、再度自己表現活動を実施して児童の心の安定を図ることにした。

第3章 実践の結果

第1節 2年生での実践

1. 宿題としての自己表現ワーク

自分の宝ものについて書き出す「わたしの宝もの」、自分を元気にしてくれるものを思い出す「元気リスト」を実施し、保護者にも書いてもらう欄を設けた。保護者からは「子ども」という意見が多く、児童は安心感をもてると実感した。元気になることとして、児童は家族や友達との時間を書いている意見が多く、まだまだ幼くて一人では不安なのだろうと感じた。

2. 自己表現とSGE

1で実施した2つの活動などを学級でシェアリングした。友達の見意見を認めたり、自分と似ている意見を見つけたりと、他者理解を深めることができた。自分の心を絵で表現する「ころのお天気」では、多くの児童がハートで作ら

れた枠をはみ出して自由に表現しており、教育的退行を促し、自己表現に効果的であった。ゆっくりと深呼吸する「呼吸を数える」では、授業中に騒がしくなった児童に対して、静かで落ち着いた雰囲気を取り戻すのに有効であった。

3. コグトレ

見る力や聞く力を伸ばす活動では、最初正答率が低かった児童も、繰り返し活動を行ううちに成績を伸ばすことができ、継続的に実施することで効果の表れることが分かった。また、児童から見たり聞いたりするコツを発表させて共有したことも正答率の向上につながった。集中力を高める活動では、児童からコツが発表されなかったが、継続した取組によって成績が向上したと考える。

第2節 5年生での実践

1. 宿題としての自己表現ワーク

2年生と同じ活動を実施した。児童からはゲームやネットなど一人で過ごす時間を楽しむという意見が多かったこと、保護者にも家族以外の時間に関する回答があり、児童が少しずつ自立しようとしていることが見受けられた。

2. 1学期の自己表現ワークとSGE

着てみたいTシャツをデザインする「カラーワーク」では、ほとんどの児童が作品作りに没頭し、自分が表現したいものを自由に描き進められた。ただ、昨年度登校しぶりや保健室登校が多く見られたAさんは、何も描くことができなかった。紙に適当に線を引き、その紙を友達に渡して続きを自由に書いてもらう「つづきをどうぞ」でも、Aさんは友達からもらった紙に何も描けなかった。しかし、友だちからの優しい声かけにより、自分の思いを表現した事例を紹介した。

3. 2学期の自己表現ワークとSGE

自分たちで自分たちの学級をよりよくするしていくことをねらいに、文や絵で「理想とする5年生のすがた」を表現する活動を行った。その結果、今の不満な思いやめざすべき姿をかき表すことができ、5年生の様子が落ち着き始める効果が認められた。また、病休の担任に向けてメッセージを書く活動では、「早く帰ってきてほしい」「いっしょに遊びたい」という温かい言葉がたくさん表現され、担任への深い思いやりを見取れた。

第4章 実践の結果と課題

第1節 学級力について

1. 目標達成力

5年生が、自分たちで自分たちの目標を考え出したところに目標達成力の一つの要素である目標設定力を養う効果が顕著に認められた。これは、自己決定の場を与える生徒指導の機能も作用したと考える。また、自己表現活動による自己開示により、児童の心を開放するカタルシス効果が認められたことを考察した。

2. 創造的対話力

表現物をシェアリングすることで、友達の意見を尊重したり内容を適正に評価したりするといった対話に関する力を養うことができた。この活動は、相手の意見を認めることから自己存在感を与えることや共感的な人間関係を育成することに作用させると効果的であることが示唆されたことを考察した。

3. 協調維持力

5年生の自己表現活動の際、Aさんや周りの児童には、お互いにつながろうとする発言や表現が交わされることで、学級内が明るい雰囲気にも包まれ、支え合い、認め合う関係性が生じていたと考えられる。まさに、協調維持力が発揮され、学級力が高まった場面と捉えた。

4. 規律遵守力

コグトレは児童にとって遊び感覚でできる活動であり、取り組みやすいものであった。それゆえに、ゲーム感覚で時間を守ることが習慣づけられていった。時間制限を設けることで活動が楽しくなるような取組は学習規律を守るきっかけとなることが示唆された。

第2節 今後の課題

本研究では、実践の初期段階で学級力アンケートが実施できず、課題を丁寧に把握できないまま実践したため、十分な検討をして考察するまでに至っていない。こうした状況を踏まえたうえで今後の課題として以下の4点を挙げる。

1点目は、言語と非言語による手法を組み合わせることで、創造的対話を生み出せる可能性である。2点目は、児童の実態やそのときの状況に応じて臨機応変な対応の可能性である。3点目は、教師、特に担任は日頃から児童理解や児童との関係づくりに努めているかが大きな鍵を握っていることである。4点目は、コグトレを学校現場で有効的に活用する可能性である。

第5章 修了後の課題と展望

2年間の大学院での学びを通して、これから筆者は、子どもたち自身の心にある学校生活をよりよくしたいという思いを引き出し、その実現に向けてともに歩もうとする姿勢をもちつづけたい。現場に復帰すれば、これまでより一層ミドルリーダーとしての役割が期待される。その期待に応え、教師の使命を全うするためには、この2年間で習得した知識・知恵、技能・技術を駆使し、教育活動に努めたい。特に、子どもが子どもらしく、そして何より筆者自身が自分らしく過ごせるような生活をめざして、私と、私に関わる全ての人の幸せを求めていきたい。